朝日 俳壇 歌壇

〈アオモジⅢ〉　日高理恵子

佐佐木幸綱選

十三年ぶりに再開する郵便局笑顔が増えた帰還住民　（郡山市）寺田　秀雄
長いけど屹度覚えむ大切な君の名パチャラプワプラパチャート　（仙台市）二瓶　真
新雪の輝く屋根を打ち重ね丘の上まで家建ち尽くす　（多摩市）豊間根則道
熱湯に放てばみどり鮮やかに生わかめ春に名乗りを上げる　（越谷市）畠山　水月
明治よりつづく棚田の畦を塗る後継者無きこの身なれども　（匝瑳市）椎名　昭雄
二〇〇年米を作りし田に立ちて法人に貸すことに決めたり　（山口県）山花　俊作
☆着なくなり初めて知った制服の堅苦しさよ転学の春　（長久手市）篠原　若奈
子を呼べる我の声音に慌てしか飛び立つ鷺に子が驚きぬ　（高知県）原　真由美
いやだなぁごみ捨て頼んだだけなのに日本の未来を論じ始める　（秦野市）三宅　節子
都電の名は〝さくらトラム〟と言うらしい始発の三ノ輪で待つ早稲田行き（横浜市）臼井　慶子

【評】第一首、なんと十三年ぶりに福島県の双葉郵便局が再開したという。第二首、来日したタイの青年の日本人にはむつかしく長い名前をうたう。第三首、久々の東京の雪に取材。傾斜地にびっしり建つ雪の日の家々が目に浮かぶ。

高野公彦選

朝日歌壇に八百余首の入選の長尾氏の死に涕あふるる　（箕面市）大野美恵子
除雪車の軽油の売り上げ昨年の半分以下と嘆くスタンド　（五所川原市）戸沢大二郎
潮騒の熊野灘辺ゆ茶の香立つ宇治に来にけり娘らに引き取られ　（宇治市）波戸　与七
☆お互いに照れてすれ違うなつかしい歌の中のわれ今生きるわれ　（富山市）松田　梨子
投稿は没になるけどその間のわくわく感の虜となりぬ　（三郷市）木村　義熙
今朝のバス少し遅れて来てほしいバス停前に満開の梅　（日田市）石井かおり
質問に答えず言質を取られぬよう意味無き言葉を連ねる総理　（観音寺市）篠原　俊則
☆毒を盛る国に戻りて闘いしナワリヌイ氏の死に驚かず　（浦安市）中井　周防
殺人鬼プーチンに触れ深夜便ナワリヌイ氏の訃報伝える　（名古屋市）甲斐万里子
雪かきのお礼に豚汁しずしずと歩き持ちゆく向かいの夫婦に　（飯田市）草田　礼子

【評】一首目、長年この歌壇で活躍した長尾幹也さんの闘病死を悼む歌。八百余首という数字が凄い。二首目、今年は全国的に雪国の積雪量が少なかったようだ。三首目、潮騒の熊野地方からお茶の産地に引っ越してほっと一息。作者94歳。

永田和宏選

シャボン玉ふいて地球の大きさをたしかめている鳥取砂丘　（鳥取市）中江　三青
☆毒を盛る国に戻りて闘いしナワリヌイ氏の死に驚かず　（浦安市）中井　周防
☆ナワリヌイ死去のニュースを聞きながら母の襁褓の世話をしている　（草加市）永吉　謙一
☆着なくなり初めて知った制服の堅苦しさよ転学の春　（長久手市）篠原　若奈
我が手から離れた校章校庭の隅っこで一人凍える二月　（東京都）小田　祐輝
一月の二十八日強靱な歌ごころ見せ長尾氏逝けり　（箕面市）大野美恵子
マロニエの花咲く並木をときめいて君と目指した山の上ホテル　（横浜市）黒坂　明也
まさおなる沖をはなれて一夜干し軒の鰹はもう泳げない　（三浦市）秦　孝浩
わが町の昭和の写真展に出す七十年前の一年B組　（壱岐市）篠崎美代子
冬の星見ながら洗う作業着の汚れを照らす懐中電灯　（岡山県）小林　和恵

【評】中江さん、シャボン玉から地球の大きさを実感するとは！　さすが鳥取砂丘。その地球ではあちこちに理不尽が。ナワリヌイ氏の死をその国民はどのように受け止めているのだろう。四、五首目は制服や校章への違和と愛着を詠う若い作者。

馬場あき子選

車内にはスマホをいじる人ばかり世界とつながり隣と切れてる　（松戸市）小柴　亘
秘密だと面接先に言ったのに今の職場に問い合わせ来る　（京都府）片山　正寛
始まる予感髪に隠せしイヤリング恥じらうきみの初の手料理　（大和市）李　種太
☆お互いに照れてすれ違うなつかしい歌の中のわれ今生きるわれ　（富山市）松田　梨子
長尾氏の訃報にふるえ浮かびくる悲哀のうたや端正な面　（大阪市）岡田　信子
☆ナワリヌイ死去のニュースを聞きながら母の襁褓の世話をしている　（草加市）永吉　謙一
新妻となりし娘が訪ね来ぬ夫を伴いよそゆきの顔で　（堺市）中井　光世
贅沢な暮らしは何もしてないがなにやら金のなくなる老後　（静岡県）野月　真人
所得などなき身なれども医療費のかさみて確定申告をする　（栃木県）川崎　利夫
征爾氏は気さくに話し吾と写るウィーン街角ののち二十年　（富士市）橋本　民子

【評】第一首は最近いよいよ気になる車内風景。下句は言い得て実感がある。第二首の転職事情も油断ならない。第三首、久しく出会わなかったみずみずしい青春歌。第四首はよく体験する旧作再読の歌人の感慨。成長期の楽しい屈折感だ。

うたをよむ　人生を刻んだ投稿歌

朝日歌壇に半世紀近く投稿を続けた大阪府和泉市の長尾幹也さんが1月末、闘病の末に亡くなった。66歳だった。

初掲載は高校3年生の時。経済的な理由で大学の夜間部に進み、中堅の広告会社に入社。「向いていない」と悩みつつ営業の仕事を続けた。自ら人選して告げた解雇。降格。単身赴任。「苦しい時ほど歌は生まれた」と話していた。

リストラに幾人を切り捨てしのち彫像のごと我はひび割る

62歳の時、多系統萎縮症と診断され、近年は闘病がテーマに。会話が難しくなった昨年11月以降も、ベッドの傍らで妻朱美さんが「短歌する？」と聞くとうなずき、視線入力機器を使って詠んだ。「気持ちをぶつけるのではなく、作品として完成させたいという思いが最期まで強かった」と朱美さんは振り返る。

妻は泣きわれは視線に文字を打つ午後の病室蝶も鳩も来ず

最後の投稿歌を1月7日付の紙面で1首目に選んだ選者の永田和宏さんは「難病にかかりながらも詠み続けた歌は、読む人に、生きていくとはどういうことか問いかけるものになっていた」と語る。

歌集を2冊出し、短歌講座で教えた長尾さんが投稿を続けたのはなぜか。2年前の取材で尋ねると「新聞歌壇には大衆の息吹や活気を感じます。いろんな人生が見られるし、歌を詠まない人も読んでくれるところがいい」と返ってきた。

ファイルに収められた掲載歌は830首。歌を通して長尾さんの人生に触れた読者からいま、追悼の歌が次々に寄せられている。（歌壇担当　佐々波幸子）

風信

藤英樹著「俳句500年　名句をよむ」　著者は「きごさい」編集長。室町時代の心敬から現代の稲畑汀子まで、古今の名句を深く読み解く。（コールサック社・2200円）

岸本尚毅著「俳句講座　季語と定型を極める」　短い季語と長い季語の扱い、定型にどう収めるか、切れ字の使い方、韻律をどう作るかなどを例句で解説。（草思社・1980円）

☆印は共選作。掲載作は記事への引用や、電子メディアやSNSへの掲載・収録をすることがあります。投稿は無地のはがき1枚に1作品、未発表の自作のみ。作品の横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661　晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。二重投稿は不可。選者が添削する場合があります。